
彼女達が「生きた」ように

流星 ノル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

彼女達が「生きた」ように

【Nコード】

N0302BA

【作者名】

流星 ノル

【あらすじ】

サイトの改装の為転勤してきました。
自己満足な団固さんフルボッコ小説。

ブログ 「主犯」 (前書き)

予告していたお話です

お正月のお話からして・・・

団固さんボツロボツロになります。いいっすか？

いいって人はみていいですよ。

だってだって団固さん何か不死身みたいだけどやっぱ死に掛けるって知っておいて貰いたかったんだ

いや・・・あの・・・双子ってかわいいですよね（あれ？

プロローグ 「主犯」

私は家をでて思いっきり背伸びをした。

今日は久々の休日だからだ。

地獄に言ってもいいが、昔のようにもうすぐ死ぬ人間を探すのも悪くない

おもえば、あの日アリサにあったんだよな・・・
全てが、凄く懐かしい。

「ねえ貴女、団固・・・よねえ？」

呼ばれて振り向く。

知らない声だ

第一印象は・・・

長く紫の髪、黄色の目、水色の大きなイヤリング、真っ赤なチャイナドレスもどき、それらを台無しにさせるように麦藁帽を被った私と同じ年くらいいの・・・いや、もっと年上だろうか、そんなに年は離れていないように思えるほど、美女だった。

無論私はこんな美女とは知り合いじゃない。

彼女は笑顔で話を続ける

「これ、宴瑠に渡しておいてくれない？」

神に会ってる人間で当たれるのが貴女しかいなかったから・・・」

「・・・ということは、貴女は、神・・・？」

ニコリと微笑む彼女。

何の神かは気になったが

昔宴瑠が属を言いたくない神は沢山いると聞いたから聞かない事に

しよう

「この手紙を、宴瑠に渡せばいいんだな」

「ええ、頼めるかしら」

「・・・解った」

予定変更。

今日は宴瑠の所だな。

私は、死神界へ向かった

彼女は笑顔のまま団固を見送った

すると彼女の背後に見たことのある神が一瞬にして現れる

「水面・・・こんな所にいたのね・・・

どうしたの？団固に用なら・・・」

なんとそこには11月神がいた。

彼女は菊月を見ると顔がさつきより華やかになり

菊月に飛びつく

「あらっ！朱音！何何？

心配して来てくれたの？」

菊月は溜め息を吐き

ハッと陰しい顔になった

「・・・まさか貴女・・・あの手紙を団固に・・・？」

水面は菊月から離れクルリと愉快に周りニヤリと不気味な笑みを浮かべた

「うふふ、姉さんの復活が近づくからね
どうも神の本能には逆らえないのよ」

その言葉に菊月は思わず叫んだ

「なんて・・・事・・・！」

私が何の為に貴女を監視していた意味が・・・」

途方にくれる菊月に不気味な微笑みで水面はささやく

「朱音は見ててね。

私の書くシナリオを。

朱音は私を止める存在だけど・・・

あなたが本当に止めるのは私、星屑 水面じゃない
災いの神の星屑 水面なんだから」

第一時 「伝説の始まり」（前書き）

新キャラ紹介新キャラ紹介つと

ホシクス

ミナモ

星屑 水面

破壊の神の実妹

災いの神なので菊月に目を付けられ同居中。

第二次世界大戦で死ぬ前の枯葉に喧嘩を売られたので

喧嘩を買おうと双子を神に推薦。

いまや枯葉とは宿命のライバル

ちなみに菊月と木葉は大の仲良し

自称菊月とはラブラブ・・・らしい

第一時 「伝説の始まり」

屋敷に入る。

ドアを開けると早速

「あら、珍しいわね

あなたが自ら来るなんて」

「ああ、ちよつとお前に手紙もらつてな」

「手紙・・・？」

宴瑠の顔が鋭くなる

宴瑠は私の手から手紙を奪うと

手紙を読む。

読み終わったかと思うと小さくしたうちして手紙を破った。
そして・・・

「団固。これ、誰に渡されたの？」

「・・・。なんか服が真つ赤で長い紫の髪美人」

それを聞いた瞬間彼女は深い溜め息を吐いた後
その場に座り込んでしまった

「・・・なんて、書いてあつたんだ？」

彼女はじつと私を見る。
しばらくたって

「・・・言わないと帰らないでしょ」

宴瑠は苦笑いをする

「ああ、そのつもりだ」

私もつられて笑う。

ふと、彼女の顔から笑みが無くなり、語り始めた

「私には、二人の双子の妹がいたわ」

「妹・・・ねえ」

「・・・」

私の一族は、呪われた一族だったわ。

母は私が5の時、父は私が生まれる前にこの世を去り

末妹は10で・・・妹は13で死んだわ。

わたしは18まで生きながらえたけれど・・・」

「・・・なんでそんな不運だったんだ？」

「わからないわよ。」

末妹は神になりたいといって死んだわ

妹は神になりたいくないといって死んだ。

なのに・・・私だけ神になってしまった。

神になりたくないといった妹も妖怪に

神になりたいといったあの子も神に囚われてしまった・・・」

・・・なるほど

「で、11月の妹を助けたいと思ったわけだ」

「・・・ええ。」

「で、何だ。お前さんの妹は妖怪になっただのはともかく
神に囚われたってなんだ？

悪魔で神だろう？

そんなことしていいのか？」

「ええ、駄目よ、だって・・・」

「だって？」

「彼女が囚われたわけは・・・
私なんだから」

「なんだって？」

「私は神の命も管理している。
その神は私にけされるのが怖くて
あの子を人質に取ったのよ」

がたり。

私は椅子から立ち上がり無言で部屋を出ようとする。

「ちょ・・・ちょっと団固？！

貴女・・・まさか私の妹助けに行くんじゃないでしょうね！」

あせる彼女に私はわらって言った

「妹じゃない。妹達だ
安心しなくてもちゃんと魂を持つてくる」

ドアを閉めようとするガタタンと騒がしい音と宴瑠の悲鳴が聞こえた。

追いかけてようとしてピアノから離れたらしい。
急いで駆け寄る

彼女はピアノから離れる事が出来ない

「どうしても・・・私に行かせない気か？
そんなに言うなら無理して・・・」

「バカね・・・
勢いで駆け出しちゃ。

私の妹達の事、わからないくせに。」

宴瑠は笑う。

「じゃ、じゃあっ!」

助けにいつでもいいのか？

そう思ったら、彼女は悟ったのか頷く

「その代わり、コレを渡すわ」

彼女は一つのペンダントを差し出す。

「これは・・・?」

「それは私の神経とつなげてあるから、通信機代わりになるわだから、戦いのサポートになると思っで・・・」

彼女なりに、私の事を心配してくれてるんだと思った
心配してくれる人が居る。

私はそれが一番の幸せだ

「あ、あと・・・
これ・・・」

「?!これ・・・私の死神衣装?
持っでてくれたのか・・・」

懐かしい緑の動きやすい服をみて言っ

「ええ、いつか貴女が戦いに行く時に取っでおこっでね。
コレは戦闘力がかなり上がるから
ちゃんと自動で鎌でるわよ。」

「おお!サンキュ!」

「ええ、攻撃が避けやすいし、回復も早いから・・・」

「ああ、じゃあ・・・」

「まっで。」

いきなり神のところに行くのは無理よ
まずは妖怪化した私の妹を助けに言っで
いい?死ぬのは絶対駄目だからね」

彼女の的に、もう身近の人間が死ぬのが怖いのだろう。

「解った。

死んでも、アリスやお前が面倒見てくれるんだろ？」

笑って茶化す。

冗談だと解ったのか

「もう、バカ」

宴瑠も笑って答えてくれた。

「じゃあ、ペンダントと素敵なプレゼント、ありがたく持ってくぜ」

「ええ。気をつけて」

「ああ」

そして私の足は妖怪のすむ森へ進んでいた。

第二話 「歌の妖怪」 (前書き)

妹戦です。

歌うだけの妖怪の彼女は

何を望んで歌うのか・・・

第二話 「歌の妖怪」

私が詠うのは昔の記憶

私が謳うのはなくした記憶

私が謡うのは楽しかった日々

死神界と人間界の境にある

妖怪の住む森、通称“妖怪の巣”

団固は、森の前でたたずんでいた。

「・・・」

宴瑠、聞いているか？」

ペンダントに問う。

すると答えが返ってくる

『聞こえてるわよ、どうしたの？』

団固は目の前を見ながら

「この森・・・結界が張ってあるんだが・・・

昔は無かったよな」

『あ、そうか・・・』

団固は知らなかったのよね

リンカ・・・いえ、貴女の上司が妖怪をもらさないように
結界を張ったのよ。

安心して、死神の鎌で結界は切れるから』

上司の名を聞き、一瞬団固は身震いしたが
心を冷静に戻し、鎌で結界を切る。

「・・・んじゃ
進入開始」

少し進んでから、団固は耳を一方方向に向けていた

「・・・宴瑠
歌だ。歌が聞こえる」

『歌ですって？
団固、聞いてて大丈夫なの？』

歌を歌う妖怪のほとんどは、その声をきいたものを狂わすという。
しかし、この歌は・・・

「なんとも無い。
害は無いと思う」

『・・・っ！
団固！』

行き成り声を上げる宴瑠に
団固が驚く

「ど、どうしたんだよ」

宴瑠は正気は取り戻したが、あせった様子で

『団固・・・』

その歌の主・・・
多分私の妹よ』

「なんだって？」

団固は聞き返す

『妹は昔から歌うのが好きだった。

妖怪は、強い意志によって産まれるのが多いの
彼女はのどをいためて死んだわ

こっちも少し聞こえるけどその声・・・
・・・間違いないわ』

「なるほどな。

んじゃ、行くか。」

団固は歌声のほうへと歩き出した。

少し歩くと一人の少女が見えた
向こうを向いて歌っている。

団固はゆっくり近づく。
しかし・・・

「誰？」

「・・・っ？」

ゆっくりと振り返る彼女。

其の顔は・・・少し幼くもあるが宴瑠そっくりであった

声が出せずにいる団固に少女は

「・・・マナーが成ってないわね
普通話しかけるなら自分の名前を言わなきゃ」

ふと、団固はアリスに初めてあつたときを思いだした
そうおもって団固はあの日のように笑顔で答えた

「コレは失礼、私は序信石 団固。
神の使いで貴女に話を伺いに・・・っ?！」

行き成りの攻撃に後ろに下がる

「・・・へっ、名前だけ聞いてその他いらないつてか?
妹さんよ」

さっきの微笑みとは裏腹に無表情の彼女に問う

「・・・妹。

残念だけど、私に昔の記憶は無いわ
何の用か解らないけれど・・・
貴女には死んでもらうか帰ってもらうわ」

そう彼女がいったとたん
空からさっきと同じように楽譜にある五線譜が飛んでくる。
団固はそれを交わす

「帰る事は出来ない。
お前を連れて帰るまでな」

団固のその言葉に

少女は団固を睨んだ

さつきと同じ五線譜が、今度は彼女自身から出る

「同じ攻撃は通用しな・・・何っ!？」

団固避ける。が

五線譜はそのまま団固を追いかけていた

「・・・ちっ!」

舌打ちをして逃げ続ける。

鎌で切ろうとしたが

五線譜は切れなかった。

「・・・しまっ・・・うあ!」

途中でよろけてこけてしまう。

五線譜は団固に巻きつき宙に浮く。

目の前に少女が近づく。

「帰らないのなら・・・

死んでもらうまでよ・・・っ!」

彼女の目は赤く発光するのと同時に

五線譜がきつく締め上げられる

ゴキリと、団固の身体の中かで大きな痛みと音が走った

一瞬に、団固は意識を無くした・・・

第三話 「先輩」(前書き)

団固さんの命はなかなか壊れないんだぜ。
というか死神に仲間が多いのが原点なんだがなあ・・・

第三話 「先輩」

私が願うのは記憶
私が願うのは姉妹
私が願うのは・・・

「はははっ！こりゃ笑えるねえ！」

「笑わないでくださいよ・・・
人の死因を・・・」

私は船に乗り河を渡っていた。
横には長く赤い巻き髪の同い年くらいの女性が船をこぐ
そう。

私は死んだ。

この人は河流^{カワナガレ} 地子^{チコ}。

三途の川の番人だ。

この役目は死神といえはそういえない死神である

そう、物騒な鎌を持っているが

それは魂が切れない。

ただの脅し鎌なのだ。

しかもこの人こそ“三大死神”の一人。

私達の言う“上”という存在であるが為

私は今敬語なのだ

「・・・前々から言っているが

私のは私語で結構だ。

というかリンクカもカナも硬すぎるんだって」

私の憧れでもある。

「いや・・・」

でも私はそれでも後輩なので」

「えー？

同じ年なんだからさー・・・」

「けじめはけじめですから」

「・・・そ・・・つか」

しばらく沈黙が続く。

「なあ、団固。

一ついいか？」

ふいに船を止め天子が聞く

「はい。どうぞ？」

「団固は・・・それでいいのか？」

「・・・何が、ですか？」

一瞬、彼女の顔に怒りが見えた。

「守ると誓ったものに殺されて
そのまま死ぬ事が。」

チクリと胸が痛む

「・・・それは・・・
そうですけど」

「悔しくないのか？
結局守れなかったんだぞ？」

絶えられなくなつて涙があふれる
それを天子が追い討ちをかける

「リンカの言葉のとうりだったな
結局・・・」

「そんな事あるわけ無いっ！！」

つい立つ。
敬語も崩れる。
涙も止まらない。

そんな私を天風は微笑んで抱き寄せた

「私が今出来るのはこんなことだけだ・・・
零体で出来た体だから温める事は出来ないが・・・
ごめんな・・・

私は魂をきる事が出来ないから
妹助けの手伝いはできない・・・」

その言葉を聴きながら
私は人間になる前日の話を思い出していた・・・

「・・・で？」

妹を助けて何がしたいの？」

オレンジの短い髪を揺らしながら
クジカゲ
籤陰　凛華は私の目の前に居た
リンカ

「私は・・・」

「妹を助ける為に人間になるだなんて・・・
そんなくだらない理由で人間になるの？
ふっ、バカバカしいわね。」

「ちょっと・・・言いすぎなんじゃ・・・」

天子が止めに入るが

「あれはアレでちゃんとあのこを送るつもりでやってることだから・
・
見届けてあげよう？」

癒々那　ユユナ
香奈がとめる　カナ

私はあの後長い説教の後ようやく人間になる。

「団固。」

「ん？」

「リンカたちには黙っておいてやる
だから、生きろ！」

「え・・・ちょ・・・うわっ！」

何を思ったか天子は私を三途の川に突き落とした

「・・・ふう」

私は船の上で団固が沈むのを見送った。

三途の川に落ちれば生き返れる。

彼女は私なのだ。

私もかつて“妹”を助ける為にがんばった。

でも、結局彼女を助けることは出来なかった。

「・・・天子・・・」

私は人間になるのを途中でやめたのだ。

人間になつて守るにしても・・・

そう、天子と種族が違つてしまうから。
アマネ

天子は河童のなかでも泳ぎが優秀。

姫の座まで辿り着けた。

私は其れを一番喜んだ。

でも・・・

私が生きてたら、邪魔だつたんだ

姫の座につけば

姉がいた場合どんなに妹が優秀であれど

その姉が姫の座についてしまう。

だからこそ私は自殺した。

あまり人を殺すのは慣れていない。
だから私はこの役職を選んだ

「うまくいけばいいが・・・っ！
・・・なんだ、あんたらか」

気配があり、振り向く
同期である凜華と香奈がいた。

「暇だから遊びに来たよー」

「上司になってしまつと仕事がなくなつてしまふのよね」
ともに呆れ顔をする二人を見て思わず笑いがこみ上げる

「何がおかしいの？」

凜華がさめた声で聞いてくる

「いや？」

あ、そうだ、二人つて姉妹いるか？」

行き成りの質問に一瞬二人がキョトンとした

「あー・・・うん。

私はお姉ちゃんと妹が二人づついたかなー
大家族だったからねえー」

「私は・・・
そうね。」

妹がいたわ」

私は凜華の言葉を見逃さなかった。

「妹、か。」

凜華、団固は覚えてるよな」

「・・・え、ええ。
覚えてるわよ」

「あなた団固に
妹を助けるのはくだらないといったな？
何故妹がいるのにそんな事が言えた」

少し間が空き、凜華は口を開いた

「何故って・・・私は愛がわからないからよ
私死ぬ前悪魔だったからね。」

「あれ？
そういえば魔界城のメイド長ってたしか・・・」

香奈の一言に凜華が笑う

「ランカ、籤陰 蘭華。
そのこが私の双子の妹。
そして、私の死因ね。
・・・聞きたい？」

「・・・いい。」

聞いても得にはならんだろう
私は妖怪だったなあ・・・
香奈はなんだった？」

「私は・・・
えへへ、天使」

香奈はそう言って苦笑いした。

「へえ、天使でも命を粗末にするのね」

蘭華が笑う

「まあねー？

でも私は愛のために死んだのよー？」

「バカバカしいわねえ」

「そちらこそー」

くすつと笑ってしまう

「何で笑うのよ？」

「何で笑うのー？」

「いやー？仲良くなっておもってな？」

にっと笑って答える。

妖怪・天使・悪魔が仲がいいのは本当に私達だけだろう。

人間・人間・人形の団固達も珍しいが・・・。

ああ、世界は狭いな。

団固、もう殺されるなよ

神に殺されるなよ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0302ba/>

彼女達が「生きた」ように

2011年12月31日18時49分発行